

消費者から生産者への脱皮

厚意は継続すると権利になる。

成長と組織づくりのためのマインドセット転換

PHOENIX 愛知

【究極のテスト】
体育館のトイレト
ーパーが切れたとき、
あなたはどう動くか？

「ストックがなくなりました」と
報告して終わる（大半の無意識な選択）

自分でストックを探しに行く
（行動の第一歩）

自分で補充する、あるいは次にどうすべき
か解決策を考える（当事者の選択）

たったこれだけの違いの中に、「問題を発見するだけの人」で終わるのか、
「問題を解決する人」になるのかという、決定的な分岐が潜んでいる。

「報告＝善」という思い込み



その奥に潜む
「あとは運営側がやってください」
という他責思考

もし子どものジュニアクラブで、指導者が一人でトイレ掃除をしている横を保護者が素通りしたら、誰もが違和感を覚える。しかし大人向けの環境になると、なぜか「誰かが整えてくれる」ことを平気で受け入れてしまう。

適切なメニュー、シャトル出し、問題点の発見。
すべてを「してもらう」側に立つ限り、人は永遠に「お客様（消費者）」のままである。

厚意は、継続すると権利になる。

最初はありがたかったはずの環境維持活動も、毎回続くと人は感謝を忘れ、
「いつもやってくれる」から「それはあの人やる仕事だ」へと麻痺していく恐ろしい心理現象。

【感謝】掃除や設備の準備に頭が下がる思い
（「今日もやってくれた」）

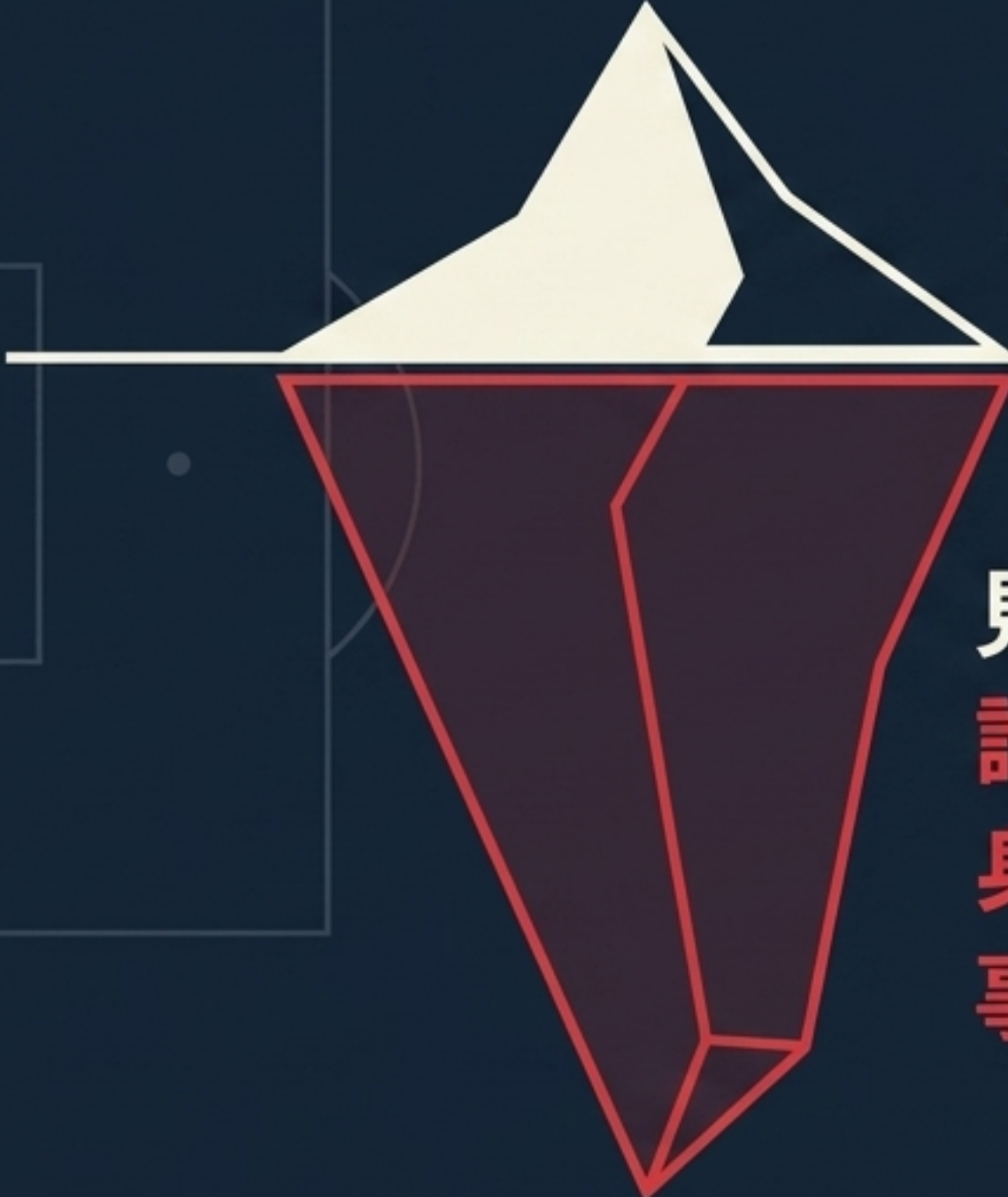
【慣れ】環境が整っているのが当たり前になる
（「いつもやってくれる」）

【当然・義務】善意が、提供されるべきサービス
へと変換される（「やっておくべきだ」）

【不満】やってもらえなかった日に怒りや
不満を抱く（「なぜやっていないのか」）

厚意を当然だと思ふ心は、感謝を失うだけでなく、
自分自身の「主体性」や「成長する力」までも奪っていく。

見えない仕事に気づく「感謝の解像度」

An iceberg diagram with a small white tip above a horizontal line and a large dark red base below it. The tip is labeled with visible work, and the base is labeled with invisible work.

見えるもの: 練習が予定通り始まる /
照明がつく / トイレが使える / 水がある

見えないもの:
誰かの時間 / 労力 / お金 /
身体を動かすこと /
事前の気遣い

アナウンスされたからお
礼を言うのではない。
何事もなく活動できてい
る背後に、誰かの労力があ
ると想像できるか。

汚れを見つけた時、「誰の
仕事だろう」と避けるか、
「自分にできることはない
か」と考えるか。

そこに心構えが表れる。

消費者

生産者

環境への基本姿勢

誰かが整えてくれるもの
(サービスを消費する)

自分で整え、支えるもの
(場をつくる)

問題発見時の思考

「誰の仕事だろう」
「自分には関係ない」

「自分に何ができるだろう」

トラブル時の対応

報告して、解決を
運営側に渡す

解決策を探し、
自分で引き受ける

「誰の仕事だろう」と考える人は、お客様。
「自分に何ができるだろう」と考える人は、仲間。

日常の姿勢と競技力は「完全に直結」している

日常

トイレトペーパーが切れた。



「なくなりました」と
報告するだけの人。



= 問題を他人に渡す

競技

レシーブができない。相手が強すぎる。



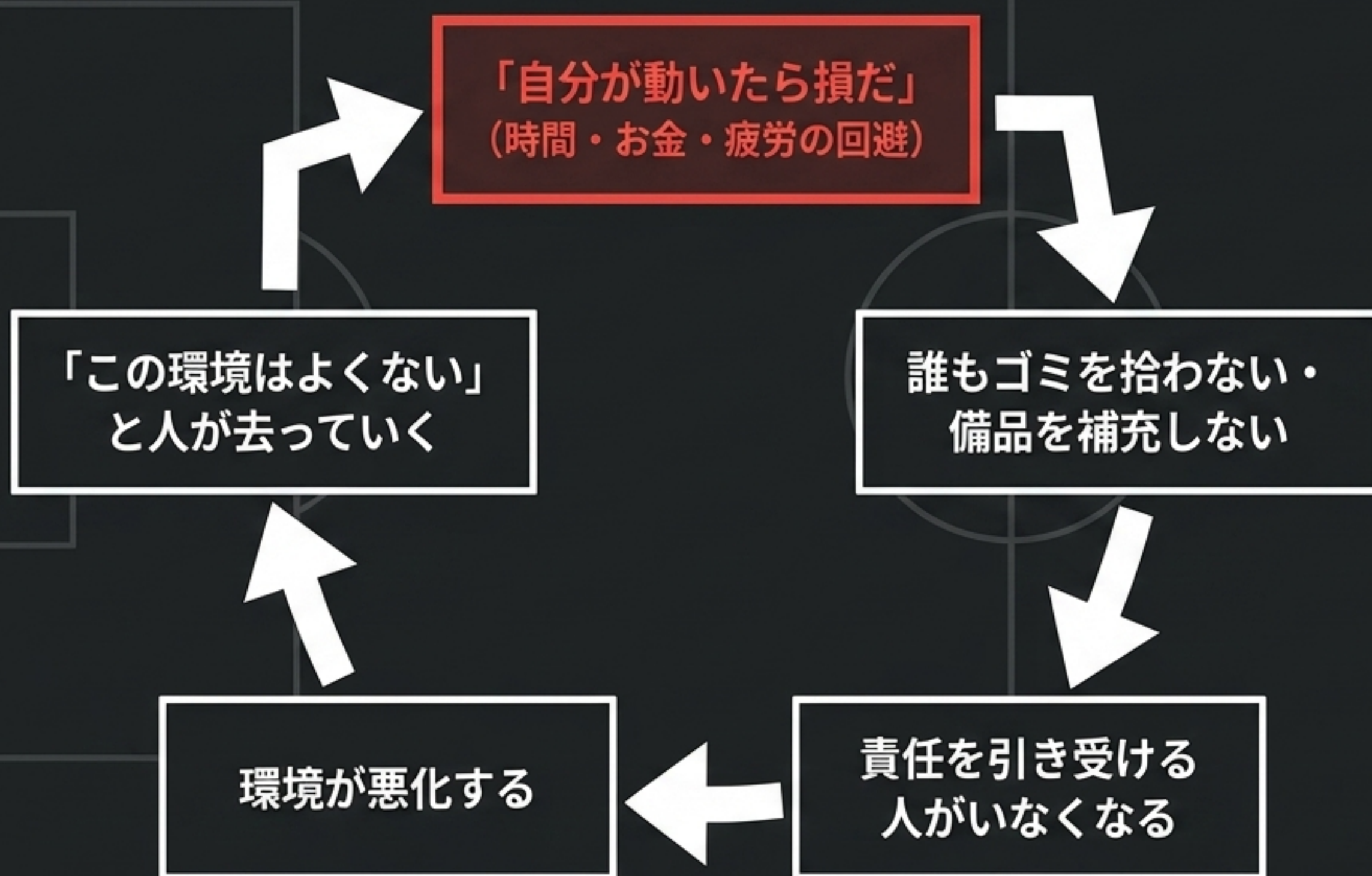
「できません」「調子が悪いです」と
報告するだけの人。



= 問題を他人に渡す

試合の時だけ別人にはなれない。日常の小さな問題をすべて誰かに渡す人が、
試合の苦しい局面だけ、自分で考えて打開できるはずがない。

「合理性」が招く環境の崩壊



短期的には、動かないほう得（合理的）である。

しかし、全員がその合理性を選んだ場所は、必ず壊れる。

悪くなった環境は最初からあったのではな、一人ひとりの「損を避けた結果」として生まれる。

「仲間」の再定義

~~練習に参加する + 施設を使う = 仲間 (×: それはサービスを消費しているだけ)~~

所属する + **【見えない損（負担）
を共有する】** = 本当の仲間

チームの名前を名乗るだけでは仲間になれない。誰かが見ていないところで、ほんの少し自分の時間を使い、面倒なことに手を伸ばせるか。良い環境とは、豪華な設備ではなく、「損を引き受ける人の善意」が静かに積み重なっている場所である。

圧倒的な競技力・実力の向上

(自分の課題を探し、自分で試し、行動を修正する力)

主体的な行動と環境の生産

(自分で気づき、考え、動く。
指示される前に修正し、必要な責任を引き受ける)

日常の他責思考の排除

(ゴミを拾う、備品を直す。
「自分がやったら損だ」「誰かの仕事だ」というお客意識を心から掃除する)

上達は、コートに入る前から
すでに始まっている。
お客様意識を捨てることこそが、
上達の最強の土台となる。

あなたは、この場所に、
何を受け取りに来ているのか。
それとも、何を与えに来ているのか。

誰かがつくった環境を消費するだけの人になるか。

自分の時間と労力を少し差し出し、環境を次の人へ手渡す人になるか。

その「トイレットペーパー一個分」の小さな選択の積み重ねが、まったく異なる人間をつくり出す。